

唾液中のαアミラーゼ活性の変動におよぼす食生活の影響(その2)
 昭和女子大短大 ○田中伸子 岡村浩

目的 唾液中のαアミラーゼについては、従来より酵素学的研究が多く行なわれてきたが、食の営みとの関連性についてはほとんど解明されていないのが現状である。αアミラーゼは消化酵素であることより、当然食の営みのなかで活性を変動させる要因につき検討を加えてゆく必要があると考え、本実験を行なった。

方法 αアミラーゼ活性測定法として、ウッルステッター法、ジニトロサリチル酸法を用いた。唾液は、口腔内に自然に分泌される各唾液腺の混合唾液を採取し、よく攪拌したのち、適宜希釈して用いた。

結果 唾液中のαアミラーゼ活性と食の営みの関連性につき、食物を口に含んで飲み込むまでの咀嚼回数が多い者の方が、少ない者より活性が高いことはすでに報告した。そこで、本実験ではさらに関連性を明確にするため、被検者として健康な同一年令の女子大生57名を選び、αアミラーゼ活性の測定、アンケート調査を行ない、再検討を加えた。活性の平均値は前回(278 mg/ml saliva)と近似した271 mg/ml saliva が得られた。採取した唾液のpHを測定したところ平均pH6.87となり、弱酸性であることより安静時の固有唾液を採取していることが確認できた。アンケート調査結果につき、有意差検定($\alpha = 0.05$)を行なったところ、前述の咀嚼に関する結果が得られた上、さらに澱粉性食品を好む人は、好まない人より活性は高いこと、コーヒー、緑茶を好む人は、普通であると答えた人より活性が低いことが認められた。